東京学芸大学リポジトリ
Tokyo Gakugei University Repository

多様な他者とともに生きる力を育てるために：イマージョン教育及びオンライン授業から見えてきたもの

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-04-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 武田,茂雄 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/00173785

多様な他者とともに生きる力を育てるために
―イマージョン教育及びオンライン授業から見えてきたもの―

前ロサンゼルス補習授業校あさひ学園教諭
宮城県大崎市立鳴子小学校教諭　武田　茂雄

キーワード：多様な他者、生きる力、イマージョン教育、オンライン授業、学校経営

赴任校の概要(2020年4月1日現在)
学校名・日本語:ロサンゼルス補習授業校あさひ学園
学校名・現地表記:Los Angeles Japanese Saturday School
URL: https://www.asahigakuen.com/

1．はじめに

現代は人々が国境を超えて移動をする流動的な社会になってきている。新型コロナウィルス感染の広まりはそのことを裏付けている。仕事や国際結婚のため、または学生として日本に住む外国人及び外国に住む日本人が増加している。日本は、単一言語、単一文化の社会といわれているが、将来的には、いろいろな言語や文化の人々の社会になることが予想される。より良く生きていくためには、自分と異なる言語や文化背景、価値観を持つ多様な他者と共に生きる力が必要であり、そのような力を育成する教育が喫緊の課題として望まれている。そのことは新学習指導要領でも謳われている。

具体的にどのような教育が、自分と異なる他者の理解、寛容の態度を育て、多様な他者と生きる知恵を育てることができるのか。その一つの試みがロサンゼルス近郊の公立校で行われているイマージョン教育である。私は、その教育を視察する機会を得た。そこでは、日系アメリカ人だけではなく、日本にルーツを持たないアメリカ人もいた。授業はすべて日本語で行われ、国語以外も教えていた。その様子を視察し、この教育は、子どもの他者への理解、寛容の態度の育成につながるのではないかと感じた。アメリカで行われている日本語のイマージョン教育の様子について報告するとともに、その可能性について考察したい。

また、令和2年度の本校の授業は、新型コロナウィルス感染症防止のため、1年間を通してオンライン授業を行わざるを得なかった。私自身も全く経験がなかったので、模索しながらの実施であった。いろいろな困難があったが、オンライン授業を行う中で、新しく発見したことも多かった。もちろん教室での授業は大切であり、子どもと教師、子どもたちどうしの関係づくり、一緒に楽しんだり乗り越えたりすること等たくさんのことを学ぶことができる。一方、オンライン授業は、画面の中だけでの交流ではある。しかし、全世界のどこからでも参加しようと思えば授業もできるし、授業に参加することもできる。日本にいながらにして、全世界の人々と交流ができる。イマージョン教育とともに、オンライン授業の中に将来の日本の教育のヒントがあるようにも感じた。

イマージョン教育とオンライン授業から、多様な他者とともに生きる力を育てる教育について考察する。

2．イマージョン教育現場の視察

⑴　イマージョン教育とは

イマージョン教育は、母語と第二言語能力を高めることを目的としている教育である。一般的に外国語を学ぶときは、その外国語を教科科目として学習する。しかし、イマージョン教育では、第二言語で算数や

理科などの教科の授業を行い、第二言語の言語環境をつくり、教科学習内容と第二言語の習得の両方を高めることができるという考え方で教育課程を組み立てている。

⑵ EL Marino Language School の視察（2020/2/25 訪問）

☝EL Marino Language School

EL Marino Language School は、日本語のイマージョンプログラムを行う学級が各学年 2 学級、スペイン語によるイマージョンプログラムを行う学級が 4 学級ある。教育課程は、カリファルニア州のスタンダードに基づいて行われており、使用する教科書や教材を先生が日本語に訳したものを資料として使用したり、教師が子どもの理解に合わせて独自に作成した資料を使用したりして行っている。日本の教科書は使用していないが、日本の教科書に載っている作品を題材として扱うことはあるそうである。幼稚園での活動については、すべて日本語、小学校の学習では、国語、社会、算数は日本語で、理科や英語は英語で授業を行っている。園児児童の学習習熟度が異なるため、授業はグループ学習が基本で、意図的にグループ編成してグループ学習が円滑に進むようにしているということであった。

幼稚園児の募集については、「日本語が主体」「日本語は聞いて分かる英語が主体」「英語だけで話す」の 3 つの枠があり、それぞれの枠で人数が定められている。希望数が募集数を超えた場合には抽選となるとのことであった。両親とも日本人が 3 割程度、片親が日本人 5 割程度、日本に縁のない子どもが 1 割強という割合だそうである。

日本語クラスの教職員数は 12 名で、そのうち 11 名が日本語話者である。日系アメリカ人や日本からアメリカにやってきた教師である。資格としては、カリフォルニア州の小学校教員免許状に加えて日本語指導の資格が必要である。教員以外にコーチと呼ばれるアシスタントが 2 名、それ以外に保護者のボランティアが授業をサポートしている。子どもの指導については、スタッフ同士で相談して決めているとのことであった。また、学校には、英語話者の Special Aid と呼ばれる教師が 1 人いる。しかし、いわゆる特別支援学級は設置しておらず、全員普通学級の中で指導が行われる。ADHD や LD の傾向のある児童は、担任がその子の実態に合わせたプログラムを考えて指導している。

幼稚園と小 2 のクラスを見学した。幼稚園の教室は、園児の名前カードや作品の掲示がされており、日本語に親しませようという環境づくりをしていた。机は、一人ひとり個別のものではなく、グループでの作業が中心である。25 名の園児がいたが、複数の指導者で対応していて統制がとれていた。小 2 の教室は、国語の授業をしていた。TT で形容詞に関する授業をしていた。ゲーム的な感覚で授業が進められており、子ども達は授業に集中して取り組んでいた。

視察して感じたことは、母語以外の言語に“浸す”環境をつくれば、母語以外の言語でも自然に身に付いていくということである。単に第二言語の授業ではなく、教科の学習を第二言語で行うという発想は私にはなかった。第二言語だけでなく母語の方の能力も向上するということも校長が話していて驚いた。もう一つは、第二言語でコミュニケーションをとることで、異なる文化や考え方を知ったり、相手を尊重したりする態度が育っていることである。校長も話していたが、第二言語を習得するだけでなく、友達の考え方や異文化を尊重する態度を育むことも大切にしているとのことであった。

３．授業のオンライン化

⑴ 本校の授業のオンライン化の経緯

本校は、サンタモニカ・トーランス、サンゲーブル、オレンジの４校からなっている。幼稚部・小学部・中学部・高等部の４学部があり、教職員は120名、児童生徒数は1200名を超える大規模補習授業校である。

本校では、3 月の最終授業日が新型コロナウィルス感染予防のため、休校を余儀なくされた。そして、4 月も教科書や副教材が配布することができず休校となり、子どもたちには家庭学習の内容や補助プリントを配信して、保護者の協力のもとで家庭学習という形を取った。5 月からオンライン授業を開始したが、最初は全教職員がオンライン授業に対応することは難しかったため、代表授業者による授業動画配信を行った。オンデマンド配信だったので、子どもたちは好きな時間にくり返し学習する長所はあったものの、やはり孤立感は否めず、さらに保護者の負担も増えることが課題であった。その授業を５週間続けた後、Zoom (Zoom Video Communications)を利用したオンラインライブ授業を全教職員で行った。普段は６コマであるが、教員及び児童生徒の負担を考慮して、半分の３コマ授業とした。5 月の間に何度もZoomやドキュメントカメラ、パワーポイントの使い方等、オンライン授業の方法を研修していたので、それぞれが工夫しながら授業に取り組むことができた。その形式で、夏休み前までの６週間、授業を行った。そして、夏休み明けの 9 月からは、普段の授業と同じ 6 コマの授業に取り組んだ。ただし、1 コマの授業時間は 30 分（通常は 45 分）とするとともに、小学部低学年は 5 校時限として、児童生徒の負担を軽減する措置を取った。一日の流れは教室学習同様にした。また、帰りの会の前に「あさひタイム」を設け、授業の補完や日本語力の向上、児童どうしの交流の時間に当てた。

⑵ 授業のオンライン化の長所

① 教員の確保

本校は、4つの分校がある大規模補習授業校である。それぞれの距離は離れており、教員の確保も容易ではない。オンラインになると、同日に他校の授業を受け持つことも可能となった。極端な場合には、日本からの授業も可能となり、実際に一時帰国した教員が日本から授業するという日もあった。

② 研修の充実

オンライン上では４校の教員が一同に会することが簡単にできる。同学年や同一教科ごとに他校の教員との情報交換が可能となる。特にオンラインでの授業は皆初めてなので、他の先生が同じ単元をどのように工夫して授業しているか等を情報交換することは全体の授業の質を高めるためにも大変に役立った。

③ 全世界から参加できる

機器操作の研修等は事務局に集まるという無駄な時間がないため、自由な時間に設定することができた。必要な教員にだけ個別に行うことも可能になり、全体の力量の底上げには大変有効であった。また、一時帰国した児童生徒も日本から授業を受けることもでき、今後の補習校の在り方を考えさせられた。

④ 会議の持ち方

例年会議は、執行部が事務局に集まり、会議室で行ってきた。しかし、今年度はすべて Zoom 会議となった。執行部の集まる必要がないために、事務局への無駄な移動時間を仕事の時間に当てることができた。また、必要な時は、担当だけで気軽にZoom上で話し合うことができたため、大変効率的であった。

⑤ ICT授業力の向上

オンライン授業を余儀なくされたため、今までアナログで行ってきた教員も必然的に ICT を用いた授業方法を学ばざるを得なくなった。そのため、授業方法の幅が広がったという声が聞かれた。

⑶ 授業のオンライン化の課題

① 学習評価

子どもの提出物等を確認したり、話合いや課題への取り組みの様子を見取ったりすることは難しかった。テストも家庭で行ったため、学習理解度を確認することも課題であった。そのため通知表は、3 段階評価

ではなく所見のみとなった。12月からGoogle Classroomを利用して一部の課題を提出させ、子ども達の家庭での学習状況の把握に努めたが十分とはいえない。

② 自由な意見交流

Zoom という画面上での話し合いとなるため、自然発生的な活発な議論は難しかった。小学部高学年や中・高等部ではブレイクアウトセッションを取り入れて少人数による話し合いも行ったが、やはり実際の話し合いとは異なり、話し合いが深まったかは難しい。

③ 時間の制限

児童生徒の健康を考え、1単位時間を30分に設定した。そのため、教室学習とは違った授業のアプローチが必要となった。教え込む授業ではなく、新学習指導要領の考えを踏まえて子どもをアクティブにする授業を目指した。家庭学習と授業の差別化を図り、家庭学習で習熟等を行ってもらう必要があった。

④ 交流の制限

実際の学校であれば、授業や休み時間、行事等を子ども達どうしの交流があったり、行事を通して学級の絆を深めたりすることができるが、今年度は子ども達どうしの交流が制限された。子ども達どうしの実際の交流が１年間できなかったことが今後にどのような問題となるのか気になる。

⑤ モニターも見続けることによる目や脳への影響

１日にモニターを見続ける時間トータル3時間となる。教師自身も同様である。ずっと座り続けたまま、画面を見続けることの弊害は検証する必要があるかもしれない。

⑥ 各種検査の中止または縮小

本校では、毎年、標準学力検査、日本語力検査等の学力検査や編入学検査・入学検査を実施してきたが、場所や安全の確保が難しく、中止したり、縮小してオンラインで実施したりせざるを得なかった。来年度以降も、この状況が続く場合、どのように児童生徒の能力を把握していくかは大きな課題である。

４．おわりに

イマージョン教育は、移民国家であるアメリカでは、もとの国の文化や言語も大切にされており、そのルーツに根差した教育も大切なことから必然的に行われるようになったと思われる。このまま日本で実践していくことは難しい面もあるが、英語を使って英語以外の授業を行っていくという発想は大切だと思う。日本の子ども達が、日本語とともに英語も自由に使えるようになったら、視野も広くなり、将来の選択も幅広いものになっていくであろう。「井の中の蛙」にならないように、英語アレルギーを克服し、日本語でも英語でも考えられるコミュニケーション力豊かな子ども達を育んでいきたいものである。

また、オンライン授業を今年度１年間行ったことにより、オンラインでもできることが分かったとともに、オンラインでしかできないこと、オンラインではできないことが明確になった。学校教育において、オンラインをどのように使っていくかは、まだインフラの面等で課題は多い。しかし、これからの未来社会を考えたとき、オンラインやコンピュータをどのように活用していくかが問われてくると思う。オンラインには長所も短所もあるが、オンラインでできたこと、課題を踏まえつつ、今後の日本の教育の未来も考えていきたい。特に、日本中、いや世界中の人々とつながっているという感覚は、閉ざされた島国に住んでいる感覚を打破し、広い視野で物事を見ていく上では、大切な感覚であると思う。

イマージョン教育そしてオンライン教育の両面を日本に帰ってからも自分自身のライフワークとして、この面から自分ができることを模索し、未来を託す子ども達へのよりよい教育の一助になればと思う。数十年後の日本がグローバルな考え方ができる社会に成熟している姿を想像しながら、一歩一歩前進していきたい。